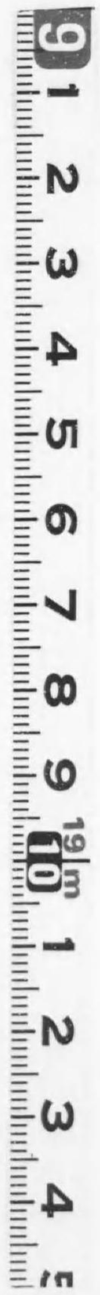
特 116
162

日支親善論



始

頁	行	正	誤
一一	一一	表彰	表載
一三	一一	週期	間歇
一六	五	數語	數敎
一六	一五	相反目	兩反目

特116
162

日支親善論

常山高津達

今や世界の大勢は驅つて日支親善の緊切を促進せり。是に於て乎兩國の識者は業に既に之を認め、太に之に努力する所あるに徴し、吾人今其必要の喋々を要せざるべし。唯奈何にせば其實を擧ぐるを得べきかの研究は、亦今日の吃緊事ならずんばあらず。宜なる哉東京朝日新聞は嚮に支那朝野有識の所懷を叩き、以て本年一月改暦の紙上に依り、之を江湖に紹介したることや。惜むらくは其所說何れも大同小異にして、兩國民の合辨事業を促し、以て密接の關係を繫がんとするに在るもの如し。是れ素より可ならざるに非ずと雖も、這は實に親善の枝葉にして、未だ以て其根原に觸れたるものとは謂ふべからず。何となれば、凡そ親善は必ず先づ精神的より融合して、而して後に物質上に及ばざる可らず。然るに彼の如く合辨事業を以て精神を融合せんとするは、恰も異宗の男女に結婚を强ふるに同じくして、假令不可能事ならずとするも、其趣味を異にするに於て、他日乖離の基たらずんばあらず。乃ち兩者一朝利害相反するの時期に遭遇せば、直に反目睽視して、其結果は却て不干の時より甚たしきに陷るの憂なからざらんや。如のみならず物質上の迎合は、素と利益を目的とするものなれば、各其利の多からんを欲するを當然とす。故に憾むらくは現時に於ける支那

陸陽新聞社寄贈本
6. 12 8

有識の諸說が、支那國家の利益保護に偏するの嫌ひなき能はざるを奈何せん。見よ孫逸仙氏の所說の如き、日本は世界列國に於ける機會均等利益均霑主義を拋擲し、專ら支那國家の位權稅權の回復に努力すべく、而して後に支那は道德的感謝を以て始めて日支親善の實を擧ぐるを得べしと、何ぞ夫れ偏執の酷だしきや。

抑支那國家の今日を爲せる所以のものは、元來朝鮮に於て日本の利益を蔑視し、自國の主權を朝鮮に扶植せんことを囑望したるに是れ始まる。當時日本は此侵害を防遏せんが爲に、玆に兩國兵を交ふるに至りたるのみ。而して支那は是よりして國家の不祥相踵き、或は賠償に、或は借款に、遂に今日の不況に陷りたるにあらずや。由是觀之、日本は敢て好んで支那の利權を侵犯したるにあらずして、日本は實に東洋存立と世界平和との擁護に就いて、支那の列國に與ふる利益の均霑に參加したるまでなるに、何ぞ知らん支那有數の識者にして此言議あり。而して日本に求むるに機會均等利益均霑主義の拋擲と位權稅權の回復努力との有形的主體物を以てして、之に酬ゆるに漠然たる無形的道德の感謝を以てせんとは、凡そ社會の事理は無形を與ふるものは必ず有形を以て之を受く。故に日本が機會均等利益均霑主義を拋擲し、且支那の位權稅權の回復に努力するに於て、支那國家が道德的感謝を以てするは强ち不可と謂ふべきにあらずと雖、唯其感謝の具體案が果して前者を償ふに足る者なるに於て始めて俱に言ふべきのみ。其漠然たる道德的感謝の如きは當然の辭禮にして、特に言ふべき程の事にはあらず。然るに日本の之を爲さゞるが故に嫉視すと言ふに至つては、恰も他を毆打せんとするに當り、其支防に會うて、却て己れの手拳の苦痛に堪へず、以て其支防者を恨むに類せずや

由來支那の民性は言議以て非を蔽ひ、謀略以て己れを利するに長ず。而して既に之を得るに至つては、則ち背信の行爲、違德の處置、又敢て他に顧慮する所なし。彼れ蘇秦張儀韓非韓信の輩の如き、審に謀り能く策せしも、實は自然の公道を擁護したるにあらずして、專ら自家の隆昌を希劃したるが爲めなるは既に人の知るが如し。故に遂に支那の熟語として片恩に失する道德的行爲を稱して宋襄の仁と謂ふに至れり。抑此熟語あらしむるは、其民性に於て、容易に道德的行爲の許す可らざるを示すものにあらずして何ぞ。飜つて我日本の民俗を顧れば、未だ嘗て此種の熟語を構成せず、其然る所以のものは、民性甚だ簡直にして、義あれば則ち之を行ひ、恩あれば則ち之を報ずるが故に敢て此種の熟語を必要とせざるを以てなり。是れ實に大和民族の精華にして、此精華を稱して大和魂と謂ふ

此の如く兩國民性の扞格は、歷史上顯著なる事實にして、其間隔や甚だ遠きに在り。如のみならず近くは袁世凱氏に於て、支那民性の歷史的事實を證明したるものあり。此時に當り具體案なき道德的感謝の言辭のみを以て、既得の利權を拋棄せんとせば、歷史の證明上、先づ支那の富强に迨ふ頃は必ず干戈の逆擊を期待して、而して後ならざる可らず。危殆も亦甚だしからずや。果して此の如んば到底日支親善の實を擧ぐる能はざるなり

夫れ日本國家が列國と共に支那の利權を要求するは豈何ぞ日本の爲めならんや。實に東洋存立の爲めなり、世界平和の爲めなりとす。何となれば列國競うて支那の利權を獲得するの今日にして、獨り

日本が之を得ざるに於ては、日本は支那と共に貧弱の域に陷り、延いて東洋の貧弱となりて、世界の禍亂は玆に萠芽せざる可らざればなり。是故に日本國家は東洋存立と世界平和との爲に、常に支那國家の存立を企畫するに汲々たり。然るに焉ぞ知らん、現時支那有識の士にして、猶ほ斯の單なる事理を解せず、日本國家が貪慾以て支那の利權を侵害するが如く思惟し、此怨嗟の議を弄するに至りては、其妄も亦度し難しと謂はざる可らず

孫逸仙氏は又日支關係を論じて曰く、支那を兄とし日本を弟として、兄弟を以て論じたりき。然り兩國は兄弟たり唇齒たらざる可らず。然るに兩國々性の關係を審かにせず、徒に文化の發達、國域の大小等を以て標準と爲し、以て事を律せんとするは、遂に兩國民の心裡狀態に錯誤を生じ、爲に毫厘の差は丈餘の懸隔となりて、複た收拾すべからざる禍亂の基となるも知る可らず。會々現時に在つては兩國共に識者濟々多士なりと雖も、果して能く是等の研究に遺漏なきを保すべけんや。此に於てか吾人不肖敢て當らずと雖も亦た觀る所なきにあらず。乃ち日支親善の要は、先づ精神的に融合して、而して後に物質的に徙らざる可らざるを信ずるを以て敢て揣らず、先づ有史以前に溯りて兩國の關係を叙し、然後に其法を決せんと欲す。請ふ嘗に之を論せん

今有史以前に於ける日支兩國の地勢を攻究せんに、先づ現時に於ける支那と日本とは一葦帶水を以て隔てられ、日本は全く東洋の一小孤島なりと雖も、然れども之を地質第三紀に溯りて攷ふれば、對馬海峽は東西に延亘したる陸地にして、日本と朝鮮とは陸續地たりしなり。故に日本に附するに島國の稱呼を以てする能はざるなり

而して地球上人類の棲息は第三紀たること既に定說あり。然れども亦其發源地は小亞細亞地方を以て之に充つるを定說とせり。是れ一に進化論に於けるヘッケル等の所見を基礎として論定したるものなるが、其原人に至りては、果して奈何なる狀態が、猿猴より分離すべき人類なりやは不明なりとす。故に或る一派は地上生物が各種族に分岐せざる以前、乃ち混種の時代ありて、此時代より徐々に各種族に分岐し、而して人類も亦此時代より人類に分岐して、夫より徐々に發達し來りたるものと爲せり。此兩說は直に乖離を來すものなり。請ふ少しく其由を述べん。夫れ進化論の進化論たる所以のものは、各生物に於ける組織及骨骼等を並列して、其下等物より高等物に進むべき經路及順序の一貫する所にありとす。然るに未可知の或る時代に於ける混種の生物が分岐を起してより、各種族が獨特に發達したりとせば、其混種時代は之を延いて、自然に於ける發生力に歸着せしむべきも亦た得ざる所にあらず。然る時は既に組織及骨骼の並列は全く無意義に畢るものにして、自然の發生力より個々に發生したりと謂ふの論に歸着すべし。果して然らば、是れ已に進化論に非ずして萬物一元論若くは萬物發生根源論となるべきなり。然れども吾人は其何れの論柢なるを問はず。唯、其發源地を小亞細亞地方に限定したるは、聊不當たるを免れざるなり。何となれば此論據は主として第三紀に於ける人類の遺物が、同地方より發見せられたるに基くものなりと雖も、然も前二說が其何れに依るも、原人が地上に遺物を存するまでには、地球上既に多數の人類の棲息したるものならざる可らず。故に現今之を發見するは、僅に遇然の結果なれば、該地方より之を發見するも亦遇然ならざる可らず。果して然らば何ぞ該地方を以て原人の發源地と爲すを得んや。如のみならず該地

方は白人を以て主要住民と爲すべきを以て、此論定より之を斷せば、則ち人類の原種は白人なりと謂はざるを得ざるべし。然るに奇なる哉現在に於ける各種族の混血は、其類形黄人に偏するの傾向を有すと云へり。此傾向は其原因何れに存するを知らずと雖も、故坪井正五郎博士の如きは、人類元來の原種が黄人なりしを以て、混血の場合に著はるゝ作用は、其原種に還元するにあらざるなきかの觀察を下せり。若し此觀察にして妥當なりとせば、其發源地は亞細亞地方に求むるを至當とすべし。然れども吾人は其觀察の當否は敢て問はず。只人類が第三紀に於ての棲息を認容せば、當時既に地球表面の全部に亘りて棲息したりと推定するの妥當たるを信ず。乃ち遺物其物の如きは、實に當時に於て之を後世に遺留すべき意思なく、遇然の結果に依り遺存したるに外ならずして、之を今日に發見するも亦遇然ならざる可らず。然らば則ち現在遺物未發見の地と雖も、必ずしも遺物なきにあらずして、後來或は發見することあるやも亦知る可らず。故に遺物の存否を以て其發源地を決せんとするは、恰も落羽を拾うて飛鳥の巣の所在を決するに異ならずして、頗る本末を誤ると謂ふべし。寧ろ混血の場合の變化狀態を採るの確實なるに如かずとす。是に於て乎吾人は黄人を原種として、其發源地を亞細亞地方に求むるの適當なるを信ずる者なり。然り而して此時に當りて日本は第三紀に於ける大陸東方の一角として打算せざる可らず

吾人は既に人類の原種は一元にして黄人に歸着し、日本は第三紀に於ける大陸の一角たること之を知るを得たり。進んで更に民族關係を攻究せざる可らず。夫れ支那民族は之を大別して三種と爲すを得べし。乃ち其一は蒙古民族にして、又他の一は支那南部民族とす。此兩族は全然其種別を異に

して、共に支那民族と謂ふと雖も、決して同日にして論すべき者にあらざるなり。然るに支那中部の民族に至つては、或は蒙古族に編入するも可なり。或は南部族に加ふるも妨げず。故に此民族は南部及蒙古の混血より成りたるものと推定すべし。而して支那民族とは實に此混血族を稱すとせば則ち知る、支那民族は特種獨立の種族に非ずして、實に南部及蒙古の支族たることを。然るに蒙古民族は我アイヌ及北米土人に類形し、南部民族は印度及西藏又は南洋諸島民族に類形す。是に於て乎吾人は更に印度民族を瞥見せざる可らず

夫れ印度民族は之を別つて四種と爲す。曰婆羅門、曰刹帝利、曰毘沙、曰首陀。而して婆羅門、刹帝利、毘沙の三種族は共にアリアン族の一種にして白人系に屬し、之を西方民族と爲すも、之に反して首陀の一種は黄人系に與すべきを以て東方民族に屬すとす。然らば首陀は印度に自發して土地と共に印度に蕃殖し、而して其種族を東方に散布したるものならんか。否な首陀は其原住地を明かにする能はずと雖も、印度に自發したるものにあらずして、反つて東方より印度に移住して。既に印度の面積を領したるに、以上三種族が漸く西方より侵入し來りて、在來の住民たる首陀を壓抑し、以て之を奴隷の境遇に陷れたるものと推定せらるゝなり。由是觀之支那南部民族は必ずしも印度種族の支那南部に移住したるものと謂ふを得ざるべし

轉じて日本民族を顧みるに、日本朝鮮は同一種族にして支那民族と分離すべきことは既に定說あり然るに其母族の學說に至つては、未だ其揆を一にする能はずして、學者各說を異にし、或は蒙古種族と云ひ、或は南洋諸島民族と云ひ、或はアイヌ或はコロボックルと云ふと雖も、然れども其論證

に至つては何れも甚だ薄弱にして、斷乎として之を主張する能はざるのみならず。既に人類の原始は一元にして、其原種は黄人に歸着すべしとせば、蒙古及南洋諸島或はアイヌ或はコロボックル、果して黄人中の原種なりや否や、吾人甚だ疑ひなきを得ざるなり。若し夫れ對島海峽が、日本朝鮮の陸續地たる遺物として我日本を觀察し、而して日本朝鮮民族が同一種族にして、全く支那民族と隔絶すべき者たる事實に徴するときは、延いて陸續地たる支那と日本朝鮮とが、人種上何故に分離すべき結果を生じたりやの疑問なきを得ず。此れ一の攻究問題ならずんばあらず。然れども既に日本朝鮮民族は支那民族にあらざるが故に、勢ひ蒙古種族にもあらず、將又南洋諸島若くはアイヌ、コロボックルにもあらずして、實に獨立したる一種族と見做さゞるを得ざるなり。果して然りとせば日本朝鮮民族と支那民族とは其原種を異にしたるものなりや否や。人種一元は人類學上の定説にして、黄人種中に二種あるべきの理なし。是に於て乎吾人は更に宗教的狀態より觀察せざる可らざることゝなれり

先づ印度宗教より之を觀察せんに、佛教以前に於ける吠陀婆羅門等、其昊天を拜し、香料を散ずの儀式に於て、恰も支那古代に類似するものあり、又神を立て之を祭るの點に於て、日本神道に類似するものあり。是等の類似點より推考せば、神儒佛三者は各其形相を異にすと雖も、必ずや其由つて來たる所、一に居らざる可らず。然るに是等の儀式を執れる宗教が、印度に於ては佛教に變じ、支那に於ては儒教に發達し、唯特り日本に於ては原始より以來神道を以て來れり。故に神道と儒佛の對照を要すと雖も、佛教は其教理に於て、神道を距ること甚だ遠く、殆ど對比の要なきが如し、

只儒教に至つては其本源を易に執りて、神道と相類する所なきにあらず。故に易と神道との對照を要とす

夫れ易は八卦を以て組織せり。八卦は實に十干に出づ。十干は五行の表裏にして易の本源は實に五行に存するなり。果して然らば五行は支那に於て發見せられたる眞理なりや否や、是れ大に研究を要する問題とす。既に述べたるが如く支那民族は北方蒙古種族、南方南部民族の混血より成立したるものなりとせば、支那上古史に於ける五帝なるもの、其民族は果して何れの所屬なりや、吾人亦甚だ疑ひなき能はず。何となれば史に記する所に依れば、或は蛇身人首と云ひ、或は人身牛首等と云ふ。而して又淵海子平は東方に神あり太昊震に乘じ、南方に神あり農帝離に乘じ、西方に神あり少昊兌に乘じ、北方に神あり顓帝坎に乘じ、中央に神あり黄帝坤に乘じ等と記し、禮記月令は之を年の五季に配す。由是觀之五帝は實に五行の人格化にして、吾人々世に生存したる有形人に非ること知るべきなり。況や人類學上の見地よりして、南北兩種族の混血より成立したる民族が、此の如きの原人を所有すべきの謂れなし若し夫れ此五帝を假想の人格なりとせば、支那上古史は實に堯舜以後の史載にして、隨つて五行の創定は支那に在りと云ふの論據甚だ薄弱となるべし

蘇つて日本上古を顧れば、南方高皇產靈神（タカミムスヒノカミ）、北方神皇產靈神（カムミムスヒノカミ）、東方可美葦牙彦舅神（ウマシアシカビヒコヂノカミ）、西方天常立神（アマノトコタチノカミ）、中央天御中主神（アマミナカヌシノカミ）あり。以て支那上古と相類するあり。是れ果して遇然の契合なりや、將た傳播的關係を有するや。敢て請ふ、人は兩者現時の地理的關係の先入主を去りて、專ら第三紀以前の地理に想到し、而して後に大陸關係を以て日本を判斷するを要す。何となれば人類の坤輿に棲息したる

は、既述の如く第三紀なる定説に據らざる可らざればなり。故に吾人は更に言語關係を質さんと欲す

印度種族の或る一部は東方の移住民族たること、既に人類學上の決定を得たるを以て、敢て茲に之を問ふの要なし。唯支那朝鮮及日本の三者の言語が如何なる關係に在るかを明かにせば足るべし、故に先づ支那の語系を攷ふるに、其働詞を先に附するの點に於て、日本朝鮮語系と全然其趣を異にするものあり。加ふるに各語は獨立して其用を便ずるが故に、之を稱して單綴語と云ふ。然るに日本朝鮮語系は働詞を後に附するのみならず、各語の間に連絡的言語を加ふるの點に於て同一語系に屬す。之を稱して加添語と云ふ。乃ち支那語系と全然分離すべし。斯の三者の語系既に此の如くなれば。日本朝鮮をば一團とすべくして、支那は全く別個のものとなるなり。吾人は更に日本語源を攻究せんと欲す

顧ふに日本語源は十干を以て基礎と爲すものなり。何となれば十干は之を數に取れば一二三四五六七八九十にして、其一と十との合綴は、卽ち干の字形を爲せり。是れ干とは一より十に至るの數の謂にして、此數語の日本の發音は、卽ち比普味與伊牟奈耶胡堵と爲すなり。斯の十數を象に取れば則ち木の五木の十、火の五火の十、土の五土の十、金の五金の十、水の五水の十にして、五は伊なり、十は堵なり、伊は衣に轉じて木の衣木の堵を甲乙と爲し火の衣火の干を丙丁と爲し、戊己庚辛壬癸皆之に从ふ。是れ木火土金水の五行の表裏にして、五は陽の活働を示し、十は陰の活働を示す、而して一は天日を指し、十は地月を指し、一は日にして此兩音を比と爲し、十は戸にして此兩音を堵と爲す。戸の意義たるや閉づるなり。乃ち天日を凛けて之を閉ぢ、而して之を身に保有するもの、以て人と爲す。人の音は實に比堵なり。故に人とは一と十との合體にして、一は天たり十は地たり。是を以て人は天地を兼ね併す。故に人は天地に參し、天地人の三才茲に於て乎成るなり。此意義よりして男を比胡と爲し女を比兎と爲す。比胡は一九なり、一は日にして天日なり。九は陽の成數にして男性に屬す。故に一九とは男性の稱呼と爲る。又比兎は一六なり。牟音兎に通ひて比兎となる。而して六は陰の成數にして女性に屬す。故に一六とは女性の稱呼たるなり此他尊號の味胡堵は三九十を以てし、國號の耶麻堵は牟音麻に通ひて八六十を以て大和と爲す等、古語の此類例、殆ど枚擧に遑なく、其言語の性質は、卽ち十干各語の意義を以て、之を解說して其眞意を得べきなり。是れ日本國語の十干を以て基礎と爲すの證左なりとす

然らば知る。十干は五行にして、之を宇宙の方位に配當せば、則ち東西南北中の五位となりて、之を象形するときは則ち十字形を爲し、宇宙生滅の主宰を表載するなり。故に此五位に對して日支共に各主神を認むと雖も、支那に在つては有形的人類として史乘に之を載せ、日本に在つては理想の神として造化三神及造化參與の神と爲せり。而して言語は民族と終始すべき性質を有するものにして奈何に風俗の變遷ありと雖も、言語の根本を顚覆すべきものにあらず。故に言語は民族の類別に至便を與ふるものなり。此證左を有する大和民族は、啻に言語のみならず、或は器物に依つて表はれ或は儀式に依つて著はれたる、陰陽及五行の採擇は、殆ど國を擧げて然らざるものなきが如し。之に反して易の本國たる支那に於ては、言語の如き民族と終始すべき事象の證左を有するや否や、吾

人の寡聞末だ嘗て之を知るを得ざるなり。若し果して吾人の研究其當を得たりとせば、易の本は五行に在るを以て、易の本源は日本に在りたるものにして、其思想を日本より支那に傳播したりと云の妥當たるを信ずる也

以上述べ來りたる所に依りて、支那は儒教に依り國民の多數を薫化し來りたりと雖も、儒教の本源は易に在るを以て、易が日本の傳播なりとせば、日支兩國民の思想に些の軽重なきを認めざる可らず。此思想は則ち東洋思想にして、其學理は實に東洋哲理の蘊奥を爲すものなり。故に日支兩國民が思想を協せ精神を一にすれば、其思想と其蘊奥の學理とを世界に弘宣するに足るべきなり。然るに何事ぞ、區々の感情に驅られ、時に或は相反仄し、世界の侮蔑を招ぐことあるや。然りと雖も是等の理的を闡明せんが爲には、吾人は更に測りて、人類が何故に、又奈何なる狀態に於て、言語を使用するに至りたるやを究めざる可らず

進化論に據れば人類は下等動物の進化なりと云ふに歸着す。然れども吾人は直に此論を肯定する能はざるなり。何となれば進化論は元と宇宙現象を基礎として出發したるに非ざるを以て、宇宙の現象に符合せざる點尠しとせず。例へば男女鬚髯の有無の甄別、男女生殖器形狀差點の理據、男女形質に異別を生ずる原理等、未だ以て之を詳かにする能はざるのみならず、遺傳學上各生物の形狀は永遠に變化するものに非ざるが故に、其原始に於ても亦現在の形狀たるを主張し得べきものにして、進化論は之に對する說明の方法なきにあらずや。要するに東洋學派の演繹と西洋學派の歸納とは、其結論に於て宵壤の差を生ずることなきにあらず。是れ東洋の神人說に對して西洋の進化論を生ず

る所以にして、演繹說必ずしも正當なりと謂ふ可らず。歸納說必ずしも無缺なりと謂ふ可らず。故に宜しく兩者の得失を攻覈査察して其妥當を求むべきなり。是を以て吾人は先づ進化論の出發點に就いて、大なる疑義を懷かざるを得ざるなり。夫れ進化論は元來カント、ラプラス等の渦狀星雲說に其基礎を据くものなるが、此說や宇宙を說明するに甚だ障碍多く、爲に反對說の簇出と共に、今は全く其影を沒し、之に代ふるにチャンバーレン、モルトーン二氏の合說に成れる螺狀星雲說出て、地球の原始を說明するに至りたり。然りと雖も吾人は螺狀星雲說も、亦地球外表に於ける火山及溫泉等の狀態より、地球內部を灼熱なりと論結せざる可らざる場合に逢着せるを遺憾とす。何となれば易に於て震を雷と爲す。故に空中に雷あれば、地中も亦必ず雷なからざる可らず。是を以て地中の雷を稱して地震と謂ふ。而して地震ある時は必ず天候に影響す。否な天候よりして地中に雷を誘發するものゝ如し。雷は夫れ火氣を含みて動くが故に、地中に於て燃料に接着せば、或は爆發すべく、或は空洞に於て瓦斯石油等の燃燒を繼續すべし。又その間歇的噴火等に在つては空洞に瓦斯石油等の充實に依つて發起するものと推定するを得べき乎。由是觀之螺狀星雲說の如くなる、甚だ窮迫せる壓縮發熱說を唱ふるの要なきが如し、而して又太陽系內の各星回轉は螺狀回轉に起りたるに非ずして、微溫濃霧の凝結より各星の分離を起し、電子若くはラヂウム性樣の輕浮なる原質は一大圜球の中央に集合して太陽の素質を形成すると共に、各星の凝結は益其度を加ふるとに從ひ、太陽の原質は玆に漸く光輝を發揚して各星を照したりと推定するを得べし。故に其回轉は現時太陽に面する部分の膨脹して、其反面の收縮するに徵し、原始の回轉も亦是に基因せざる可らざるを信ず。此の如

く考定するときは、則ち此凝結過程の或る時期は、卽ち萬物發生の時期なることを發見すべし。是れ發生學上に於て、生物は地球發達史上の或る時期に發生したるの論證に恰當するものにして、人類も亦此時期に發生したるものならざる可らず。吾人は何に依つて之を證せんか。乃ち現在人類の胎生狀態より之を論ぜざる可らず。見よ現在人類の胎生は、狹隘なる溷濁中の母胎に生成して、其分娩に當つては、此溷濁中より淸涼なる空中に迸出するにあらずや。此狀態は原人發生の動機を遺傳したるものと見做すべきの理由あり。故に吾人は斷ず。地球が未だ固結に至らざる濃霧の當時に於ては、太陽より受くる光熱の濃霧團球中、其內部の攝氏三十七八度に相當したる溫度の、且溷濁せる個所は、則ち人類の發生個所にして、其成長と共に、溷濁したる氣體の中より、徐々に淸涼なる濃霧團球の外表に昇出したるものなるを。是れ恰も胎內より空中に迸出する狀態にあらずして何ぞや。故に原人は着るに衣なく、自然の溫度に依つて體溫を保持し、食するに物なく濃厚なる空氣に依つて飢餓を充足するに過ぎざるべし。此時に當つて太陽より受くる光熱の發生力と、地球原始の濃霧團球に於ける發生力とは、相合して人類發生の爲に集中し、玆に太陽と地球との發生力は、人類の爲に其一分を削減せらるゝが故に、次に發生する動物は、人類より下れる、ゴリラ、チンパンジー、猩々、狒々、猿猴と謂ふが如く、各階級を逐うて遞下し、遂に濃霧團球中心なる微溫部分に近づくに從ひ、藻類介殼等の微溫生物を發生すべし。是れ實に地球發達史上の幾萬億年唯一回なる或時期にして、卽ち原始地層を內部に、新生地層を外部として見ば、其內部は微溫の生物となり、其外部は高溫の生物となりて、各地層に一致するのみならず、遺傳學上各生物が形體不變の理は、

此時の發生たるを證明すべし

此の如く萬物發生を觀察するときは、動物殊に人類の食餌を要するは、氣體の稀薄に伴ふべきを以て、地球が緩漫なる回轉を始め、濃厚なる氣體は地上に沈下して、人類の營養たるべき氣體は、變じて草木となり、人類は之を取つて食餌に充て、以て飢餓を癒すを得べきことゝなれり。顧ふに地球の回轉は、其原始に於て太陽が濃霧を照して膨脹せしめ、其反面は收縮に於ける、此兩作用より して濃霧團球は、遂に重心點を失ひ、玆に回轉を始むるが故に、其回轉は甚だ緩漫なるべくして、其一晝夜は太だ長時間を要したるなるべし。然れども其太陽を一周したる公轉に當つて、始めて年を成し、而して又萬物は年と共に幼壯老の時期を起すが故に、各其系統を後世に遺傳せざる可らず。是に於て乎植物は春秋其季に當つて、或は開花し、或は結實又落葉し、動物は雌雄交接以て傳統を紹ぐの作用を起せしなるべし。是れ現時に於ける草木の營養及氣溫の不變は、其植物の成長のみを助長して、開花結實を忘るゝに徵し、年に於ける氣溫の變化は、以て開花結實を促すものたるを知るを得べし。故に年は卽ち萬物をして結實せしむるなり。是を以て年は動物殊に人類に對しても食慾及色慾の發達を促したり。故に原人に於ける全智全能の感能は、之が爲に掩蔽せられ、其慾情の發達と共に、徐々として遂に野蠻の域に陷りたるものならんか

夫れ全智全能の人類に在つては、一たび思へば能く己れの意思を他に通じ、他も亦能く我れの內意を知りて我意に應ずるを得べし。是れ現在吾人が賢智の者の、寡少の言語に依りて能く其意を知るに反し、暗愚の者の多數の言語に依りて尙ほ其意を通ずる能はざるに徵すべし。故に全智全能の原

人は、他の指導を俟たずして、自ら宇宙の狀態を知り、且其眞理を會得したるなるべし。是を以て原人は宇宙に五大活力あるを知りしならん。否な原人は此五大活力の凝結にして、實に五大活力其者なれば、此活力を體するは勿論とす。故に五行の方を知り、東西南北中を以て、一二三四五六七八九十と爲し、其象を執つて甲乙丙丁戊己庚辛壬癸と爲し、人類感能の退歩と共に、言語ならざれば相互の意思を通ずる能はざるに至りて、極めて簡易にして、且其意義の深遠なる十干數敎を以て談話することゝはなれり。乃ち天地を合せて之を稟けたる者は人にして、之を呼ぶに一十を以てし、其男子を一九と云ひ、其女子を一六と云ふ。此の如く言語の原始は甚だ簡易にして、只十干の相生相剋又は退殺のみに依りて、其意を授受するを得たるならんが、人類感能の退歩の益甚だしきに及んでは、愈其言語を增加し來りて、遂に語源の何たるを知らざるに至りしならん以上の推理に據つて之を觀れば、十干語源の存する所、是れ實に易の原產地ならざる可らず

然らば知る、日支兩國は假令種族異なりと雖も等しく黃人種にして、其思想は共に十干の傳統を受けたり。故に兩國は世界の侮蔑を禦ぎ、進んで東洋の光輝を世界に發揚せんとせば、須らく兩國心を一にし思ひを俱にして、日支合同の大學府を起し、日本神道支那易理を幹として、諸種の科學を之に容れ、以て日支兩國子弟を此學府に收容し、因つて以て講修研尋する所あらしむべし。而して其得たる後進は、何ぞ兩者兩反目して一致せざることやあらん。是に於て乎合辨事業の如きは、敢て勸めずして自ら成るを得ん乎。謭劣陋義を顧みず聊記して大方の敎へを俟つ

本著に對し禮狀を寄せられ又は質疑等の諸賢は凡て發行所麴町區永田町二ノ五五陰陽新聞社內著者宛にて御問合せを乞ふ

大正六年六月七日印刷（非賣品）
同　年六月十日發行

東京市本郷區本郷三丁目廿四番地
著者　高津達
發行者
東京市京橋區築地二丁目廿一番地
印刷人　渡邊素一

發行所　東京市麴町區永田町二丁目五十五番地
陰陽新聞社

177
1030

終